

# 進化する「水なし」印刷

## 環境、スキルレス、品質向上がもたらす経営メリット

今、「水なし印刷」が、高い評価を受けている。環境保護、品質の安定、スキルレス化がその特長だ。昨今の環境問題への関心の高まりも追い風には違いないが、版材やインキの改良、印刷機の性能向上、加えて「水あり」からの円滑な移行のノウハウ蓄積が普及を後押ししている。今回のユーザーは、一昨年の新工場竣工を機に水なし印刷に取組み始めた日経印刷株式会社(林吉男社長、本社・東京都千代田区)。抜群の工場環境と高い技術力が水なし印刷のメリットをさらに高め、品質向上、コスト削減に大きな威力を発揮している。昨年からはネット通販事業も開始した同社では水なし印刷の特長を活かしつつ、ワンストップサービスをベースとした新たな市場開拓に取り組んでいる。

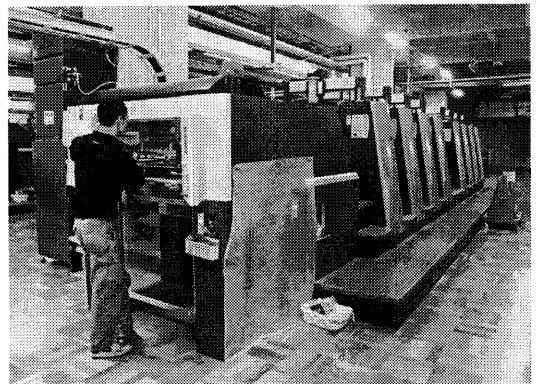
日経印刷  
グラフィックガーデン  
(東京都板橋区)

その12

いかにと見え、その取組みが始まったという。「その結果も良好であったため、グラフィックガーデン完成時に水なしでの利用を目的とした四六全判2色両面機を導入した。」

現在、グラフィックガーデンでは水なし専用機として稼働する四六全判両面2色機リスロンS2 44SP(小森コーポレーション)2台と、菊半裁両面兼用8色機スピードマスターXL75-8P(ハイデルベルグ)が水なし印刷に対応している。

現場で直接水なし印刷に携わる生産本部印刷部の青木和人G2印刷課長は「工場内は温度が完全に管理されているため、静電気も起きにくく、水なしの立ち上がりは思った以上に順調だった。見当り分けるという形は採らず、対外的にも水なしを表立ってアピールしている。」



### ◆見当精度向上を目的に導入

日経印刷株式会社は、商品カタログ、パンフレット・リーフレット、書籍など百物の仕事を中心とする幅広い製品ラインナップと、顧客の課題を解決するソリューション提案による顧客満足度重視の事業展開が特長。

一昨年の8月には、顧客ニーズにワンストップで対応するため、板橋区に最新鋭の設備と温湿度管理・自動立体倉庫など完璧な環境を整えた新工場「グラフィックガーデン」を竣工。ほぼ同時期

に印刷精度の向上を目的とした水なし印刷への取組を開始した。今では水なしが同社の主要な生産技術として定着し、版数ベースで全体の5分の1を占めるまでになっている。

東京オリンピック開催式が行われたまさにその日に創業した日経印刷。以来、45年間順調に発展を続け、現在ではグラフィックガーデンをはじめ都内4箇所の生産拠点を有し、プリプレスからポストプレス、発送までのワンストップサービスを実現している。

そもそも日経印刷における水なし印刷への取組みは、紙伸びを原因とする見当ずれへの対応から始まった。生産本部と管理本部を担当する吉村和敏取締役

絞ることで見当精度が良くなるのであれば、そもそも水を使用しない水なし印刷ならばさらに良い結果を得られるのではな

四六全判機は2色の仕事が多いため、3組2交代で土日も稼働している状態。また、参考書、パターンのオープンにあわせて新規に導入した菊半ソコンのハウツーものなど、水なしとしては珍しい特色スポットカラーが中心だが、水なし特有の刷り出しの良さと安定した品質という特長がここでも如何なく発揮されている。

「水ありとの違いを意識せず機械取り」

現場で直接水なし印刷に携わる生産本部印刷部の青木和人G2印刷課長は「工場内は温度が完全に管理されているため、静電気も起きにくく、水なしの立ち上がりは思った以上に順調だった。見当り分けるという形は採らず、対外的にも水なしを表立ってアピールしている。」

「水ありとの違いを意識せず印刷機

## ワンストップサービス実現を促進

### 特色印刷にも大きな力を発揮

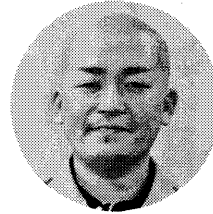
「水ありとの違いを意識せず印刷機



吉村取締役

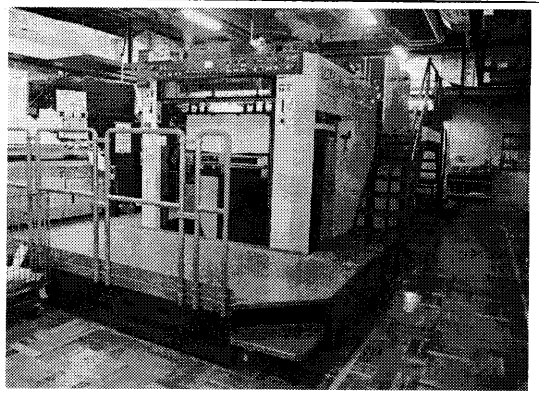


八重樫取締役



青木課長

ただ、同社は仕事によ



水なし印刷で活躍している菊半裁両面兼用8色機(上)と四六全判両面2色機

カーテンではプリプレス処理から印刷・製本、全国発送まで、すべて一棟の中で完結するワンストップサービスが実現されている。

日経印刷では昨年4月に、インターネットによる印刷物受注専門会社「印刷通販株式会社」をオープンしたが、同社に発注される無線綴じ、中綴じ冊子はじめとする幅広いジャンルの商品も、ほぼすべてがグラフィックカーテン内で製造されている。

#### ◆印刷通販ビジネスを開

現在、日経印刷では印刷部門に菊全と菊半の8色両面兼用機4台に加え、30台以上の2色/1色機、オンデマンド印刷機では富士ゼロックスDocuColor8000 AP、同Nuvera 144EAが稼働している。また、製本部門には高速無線綴じラインが2ラインと中綴じライン1ライン、各種折機(特殊折り、二つ折り含む)5台、トライオートがあり、あらゆるニーズに柔軟に対応する充実した設備がある。

そして、グラフィックまでもない。

を選べるようになってくる」とあくまで品質の整合性には妥協しない。

一方、コスト面での違いについて八重樫和義取締役は「版材は多少高くなるにしても代わりに使わなくて済む副資材もあり、トータルでは水ありと大きな違いはない」と説明する。最近では水なし導入に伴う初期投資も以前に比べ少なく済んでおり、コスト面でのデメリットはほぼなくなりつつあるようだ。

八重樫取締役は今後の展開について「水ありと水なしのバランスは今の状況がちょうど良いと考えている」と述べており、水ありとの並立での生産体制を今後も維持す